現代文学における「姨捨」の系譜(二)

――蟻通明神のこと(一)――

工藤　茂

一

大分市の高瀬に、俗に高瀬石仏と称せられる五体の磨崖仏がある。仁聞菩薩の作とする伝説があるが、実際にはいつごろ誰によって刻まれたものか明らかではない。川勝政太郎の『日本石造美術辞典』(昭53・東京堂出版)では、これを平安時代後期と推定している。

ところでこの五体の石仏のうち、右端の深沙大将の像に私の興味は強くひきつけられた。胸に髑髏を貫いた首飾りをつけ、腹に能面のような女性の顔が描かれている。眼はかっと見開かれ、赤く塗られた髪は炎のように逆立っている。左の腕には蛇が二重に巻きついていて、その伸ばした左手で蛇をしっかりと握りしめている。肘を曲げた右の手を胸のところで上に曲げ、五本の指を伸ばした掌が前を向いている。腰に赤い褌をし、両足は、両足にも二匹の蛇がからみついていて、それぞれ鎌首をもたげているのであった。

私が興味をそそられたのは、その石像の異様さのせいだったのか、あるいは深沙大将と呼ばれているその名称のせいだったのか、その時には私自身にも定かではなかった。が、今考えてみるとどうも最初にその怪奇な姿に衝撃を受け、それから深沙大将という名前に関心を引かれたもののようである。「深沙大将」という名称を耳にした時、私の記憶の中に初めはおぼろに、やがて鮮やかに浮かび上がってくるものがあった。それは東京調布市にある深大寺の縁起に顔を見せる深沙大王と、『神道集(東洋文庫本)』の「蟻通明神事」に登場する秦奢大王のことであった。

浮岳山深大寺の縁起は『江戸名所図会』[2]（角川文庫）に、次のように述べられている。

聖武天皇の御宇、武蔵国多磨郡柏野村に猟師あり。名を右近といふ。年頃山に入り水に臨んで殺生を業とす。ある時やむごとなき女来りて妻となる。名を虎といへり。その妻常に夫をいましめて殺生をとどむ。右近は妻のいふに随ひ、つひに狩漁を止む。その後一人の娘をまうけ、いつきかしづく事大かたならず。早く生長れり。然るに福満と唱ふる童子ありて、この娘に逢ひ初めにければ、父母大いに怒り、かばかり賤しき人にあはせん事本意ならずとて、二人の中をさけ、娘をばこの里の池の中島に家を営み、かしこに居らしむ。福満は日毎に岸に至りてこれを歎くといへどもかひなし。昔もろこしの玄奘三蔵渡天の時、流砂川に至りて仏を念ぜしかば、深砂王現れ給ひ川を渉し給ひし事を思ひて、一心に念じければ、一の霊亀浮み出でぬ。福満その甲に乗りて島に至り、娘にあふ事を得たり。父母後にこの事を聞きて、神明の冥助ある事を知り、随喜して娘を福満に妻あわせければ、つひに一人の男子をまうく。父母の願によりてこの児出家し、満功上人といふ。その後もろこしに渡り、大乗法相の旨を伝へて帰朝し、天平五年癸酉父の本誓により深砂大王の社を建立し、当寺を創す。その時神霊、水中の岩上に現れ給ふ。上人その尊容を模しとどめんとするに、御衣木なし。然るに七月七日玉川に霊木の流れ漂ふあり。則ちこれを得て薬師仏三体を彫刻し、一体を当社に納む。

巻末に享保七年（一七二二）十一月十一日、参議右中将藤原公尹書之という後書のある絵巻物並びに詞書二巻の縁起には、右とほぼ同じ物語が展開されているようである。[3]『新編武蔵国風土記稿』にも同様の縁起が収められている。

ところでこの縁起には、いろいろな問題が内在している。深大寺の開基上人の名が満功でその祖母が虎であることが一つ。深砂王の性格が水神であるらしいことがその二つ。そして第三は、上人が神霊の尊容を模しとどめた三体が薬師仏であったことである。第一の名前の問題は、誰でも気づくことであろうが、あの『曽我物語』に登場する虎と万劫という二女性と、その名が同じだということである。しかも、満行という名前は諸国の霊山開基に関連して多く語られているし、虎あるいは虎御前の伝説も各地に流布している。したがって深大寺縁起の両者の名も、偶然満功および虎であったとは考えられない。そこにはその名前に関連する伝承者の交渉をみないわけにはいくまい。あるいは、「箱根山を根拠地として、その信仰と物語を宣布する熊野比丘尼系」[4]の唱導者の影が、深大寺の縁起にも投げかけられていたと見るべきかもしれない。

第二の問題は主題と関連するので後回しにして、第三の問題に触れておこう。深大寺の秘仏に御本尊深沙大王像がある。残念ながら拝観の機会を得られないまま今日に至っているの

だけれども、この木像は開創満功上人の作と伝えられている。つまり伝承によれば、その昔深沙大王が影向せられた時、その尊容を写して刻んだものとされているのである。[5] ところが先の縁起では、それが薬師仏となっている。したがって、『江戸名所図会』のそれには、薬師信仰との混線が見られるようである。

さて、第二の問題に立ち戻らなければなるまい。先に引用した縁起に深沙大王のことは「昔もろこしの玄奘三蔵渡天の時、流砂川に至りて仏を念ぜしかば、深砂王現れ給ひ川を渉し給ひし事を思ひて、一心に念じければ、一の霊亀浮み出でぬ。」と書かれている。ここでは「深砂王」と「霊亀」が同一、つまり、王が亀と化して顕現したのかどうかは不明である。ただ縁起全体の文脈から判断すると、少なくとも亀は王の福満への助力として現われたことになる。それ故満功上人は父の請いをうけて深沙大王を祀ったのであった。このように水辺に顕現して川を渉すという能力を示す神は、当然水神としての性格を示すものと考えてよかろう。ことに深大寺の境内は、はるかなる過去の時代から、何か所にも泉があり、そこから湧く清らかな水は、人々の生活を支えるとともに、人々の水神信仰を育くんできたと伝えられるのだから。やがて仏教の伝来とともに、その信仰は習合して深沙大王への信仰を生んだものと考えられる。

ところで深沙大王というのは、はたして水神であったのであろうか。その名称も多様で深沙大将、深沙神、深沙神王、深沙大王などと呼ばれている。中村元の『仏教大辞典』によると、「怪奇なすがたをしてさまざまの苦難を取り除く護法の神。玄奘がインドに往復した時、守護した鬼神であるといわれる。砂漠中に起こる悪気・熱風を神格化したものか。玄奘とともに『般若経』守護の十六善神の像中に列し、あるいは同経の巻首に置かれる。また奉教鬼ともいう。」と説明されている。したがって、決して水神ではなかったのである。ところが本場の中国において、決して水神ではなかったとは言い切れない変化が起こっていって、水の神と見なしても可笑しくないことになってしまう、誠に奇妙な性格を持っているのがこの深沙大将なのであった。その間のことをやや詳しく追求している一冊の本が、ついこの十月に出版された。それは中野美代子の『孫悟空の誕生』(玉川大学出版部)である。彼女は、玄奘に与えられた資料をもとに辯機が執筆した『大唐西域記』(七世紀)、六八八年の序のある玄奘の伝記『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』、宋代に出た『大唐三蔵取経詩話』および『大唐三蔵取経記』、元刊本の『西遊記』、明代の『西遊記雑劇』ならびに明刊本の『西遊記』などを自在に引用しながら、瀕死の玄奘の夢まくらに立った「身のたけ数丈はあろう神」が、九世紀晩唐のころにはすでに深沙神、または神沙大将であったという伝承に変化し、それがさらに沙和尚、沙悟浄に変遷していく姿を追求して次のように述べている。

この伝説（玄奘が前生において何度も取経の旅に出て深沙神に食われてしまい、深沙神はそのされこうべを首飾りとし、または、袋に入れて持っていたという伝説）の出所は、『大唐西域記』巻十二「大流沙」の項と、それに『慈恩伝』（『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』のこと）巻一に、莫賀延磧の手前の砂漠で、「ごろごろしている骨や馬糞を道しるべにやっと進んだ」と見える、このくだりであろう。このくだりが、『大唐西域記』巻一の迦畢試国（現アフガニスタンのカーブルの北東）の項において、そこの異教徒たちが「されこうべを連ねて冠の鬘にしている」と述べていることと結びつけられたのであろう。すなわち、玄奘が通った砂漠には、されこうべがごろごろしていること、そのされこうべをいくつもつないでアクセサリーにしている異教徒がいることという二つの事実から、そのされこうべは玄奘のものである、たくさんころがっているのは玄奘が前生で何度も西天取経の旅を試みながらいつもこの砂漠で非業の死をとげたからである、というふうに解釈が飛躍し、あげくは、その非業の死をとげさせたものは、砂漠の国の異教徒ならぬ深沙神であったというように変化したのであろう。

それにしても、莫賀延磧で玄奘の夢まくらに立ちその飢渇を救ったとされる深沙神が、物語の世界では前生の玄奘をいく度も食らったことになるとは、深沙神もうかばれないではないか。

このようにして深沙神は髑髏を貫いた首飾りをしたり、袋に入れた髑髏を持った姿となる一方、莫賀延磧という砂漠の難所が、沙河あるいは流沙河とも呼ばれていた、その後者の名称に引き寄せられて、実際に水の流れている河と見なされるようになり、深沙神を水の神と混同するようになったのであった。この神が中国から日本に渡って来て神と顕れ、紀州田辺の地に蟻通明神として祀られたという奇妙な話が、『神道集』に見えている。このようにして深沙大将は、いつの間にか我が国の歴史を貫流する「姨捨」の系譜に組み込まれてしまうのである。

二

「姨捨」伝説はまた「親棄山」とも言われ、おおよそ次の四種類に分類することができる。

(一)親捨奋型
(二)難題型
(三)闘争型
(四)枝折型

蟻通明神の縁起は、巨視的に見れば右のうち、(二)難題型の話に収めることができる。たとえば清少納言が『枕草子』（大系本の二四四段）に書き留めた説話を読んでみれば、そのことが納得されるであろう。それは次のような話である。

昔、ある帝の時、若い者ばかりを御寵愛なさって、四十歳

以上の者をばことごとく殺させた。

そのころ一人の中将がいた。中将には七十歳に近い両親があった。たいそう親孝行だった中将は、一日一度両親に会わずにはいられない。そこで家の地下に隠れ家を作り、ひそかに両親を養っていた。

そのようなある日、唐土の帝が日本の帝をなんとかだまして国を討ち取ろうと、知恵試しをしかけてきた。第一の難題は二尺ばかりの、丸くきれいに削った木の本末を判断させる問題であった。まったく判断のしようもないので、帝はお困りになった。中将はお気の毒なあまり、隠し養っていた老いた両親に相談をした。すると両親は「流れの速い川に、立ちながら横さまに投げ入れて、返って先に流れる方に末の印をつけなさい。」と教えてくれた。

宮中にもどった中将は、自分が思いついたふりをして両親の言ったとおりのことをさせ、木に印をつけて送らせると、まさにそのとおりであった。

ところが唐土の帝は、また難題を送りつけてきた。それは二尺ばかりの同じような蛇二匹の雌雄を判別せよという問題であった。中将はまた両親に相談し、二匹の蛇の尾に細いすばえ(細くまっすぐな若枝)をさし寄せ、尾を動かした方を雌と判断して送り返した。

さすがにそれからしばらくは何もなくてすんだ。しかし唐土の帝はまだあきらめていた訳ではなく、やがて第三の難問が寄せられた。今度の問題は、七曲に(幾重にも)曲りくねった玉で、しかも中を屈曲して穴が通り、左右にその穴の出口を持った玉に緒を通せという難題であった。そして唐土の者なら誰でもできる問題だということばが添えてあった。しかし、帝をはじめ誰にも解くことのできない難問で、どんなにすぐれた名人でも役に立たなかった。

中将はまたそっと家にとって返し、老いた両親に相談すると、両親は「大きな蟻を二匹とらえて腰に糸をつけ、穴の向うの口に蜜をぬっておく。すると蟻が穴を通って蜜を求めて行く。最初蟻につけた細い糸に、次第に太い糸を結びつければよい。」と教えてくれた。中将はその通りに実行して、みごと玉に緒を貫き、難題を解決した。唐土の帝は「なほ日の本の国はかしこかりけり」と言って、その後はそのようなことをしなくなった。

中将は恩賞を辞退し、そのかわり年老いた両親と一緒に暮らしてもいいというお許しを頂戴する。この話を聞いて、ほかの老人たちも大層喜んだということであった。

以上が『枕草子』に書き留められていた話の概略である。ただ『枕草子』の本文には、蟻通明神にまつわる紀貫之の故事がその冒頭に、蟻通明神の縁起に以上の説話を結びつける記事が最後に述べられているが、それは故意に省略した。というのは、この二つのことについては、さらに後に述べる用意があるからである。

さて右の例で分かるように、(二)難題型の話のパターンは、次のようになる。

(1)棄老を定めた国がある。
(2)隣国から難題が持ちこまれる。
(3)ひそかに老人の知恵を借りて解決する。
(4)棄老の国がそれ以来養老の国に変わる。

これと同じような話は『今昔物語集』巻五天竺付仏前の「七十余人流遣他国国語第卅二」にもある。ここでは帝は国王に、中将は大臣に、年老いた両親は母親にそれぞれなっており、またその難題も木の本末を問う問題を除いて、二つとも相違している(たとえばここでは、同様なる牝馬二匹の親子の判別と、象の体重を計かる問題)。だが、先に掲げた(1)から(4)のパターンをすべて踏襲しているのである。しかもこの話の出典は『雑宝蔵経』または『法苑珠林』とされ、これらの典籍にも同様の話が掲げられているというのである。[6] 柳田国男は「親棄山」というエッセエで、これらの話はインド起源であろうと述べているが、それが少なくとも平安時代には、すでに蟻通明神の縁起と結びついて語られていたのであった。(未完)

〈註〉

(1) 渡辺克己『豊後の磨崖仏散歩』(昭54・5・18・双林社)一六一ページ。

(2) 七巻二十冊。神田の名主斎藤幸雄、幸孝、幸成(月岑)の三代によって作られた絵入り地誌。前半十冊は天保五年、後半十冊は天保七年に出版された。

(3) 私は絵巻を直接見てはいない。深大寺発行の案内に写真で収められている「深大寺開創縁起絵巻」によった。

(4) 『解釈と鑑賞』(昭41年11月号・至文堂)八九ページ。「満紅」「虎御前」(執筆・神谷吉行)の項。

(5) 深大寺開創縁起絵巻ではそのように描かれている。

(6) 『今昔物語集』(日本古典文学大系・岩波書店)の頭註による。